

万葉図書・情報室だより46号

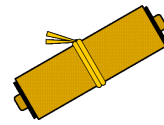
開館十五周年記念特別展のみどころ

「古代への憧憬

—近代に花開いた

古典の美—」

当館で開催した特別展



「古代への憧憬—近代に花開いた古典の美—」は歴史画を中心に扱った展示である。こうしたテーマ設定をしているため、本展覧会には人物を主題とした作品が多い。そして、その人物の姿は、描かれた当時の状況を如実に反映している。

一例として、聖徳太子の姿を見てみよう。現在、一般に聖徳太子の姿として認識されているのは、髭を蓄えた立身像の左右に二人の童子を従えた「唐本御影」と呼ばれる像である。本図は明治十一年に法隆寺から宮内省への献納が受理され、それ以降歴史の教科書などに取り上げられることによって、「聖徳太子」の姿としての認識が広まってきたという経緯がある。そのため、安田鞞彦《夢殿》（明治四十五年、東京国立博物館蔵）などに代表される近代

の聖徳太子像は、その多くが「唐本御影」の図像を参考にする形で描かれてきている。本展出品の吉田秋光筆《聖徳太子》（昭和十年から十七年、神宮徴古館蔵）もそうした作品の一つであり、法隆寺と思われる寺院を背景に「唐本御影」の姿そのままの「聖徳太子」が描かれている。しかしながら、本作の「聖徳太子」には「唐本御影」と明確に異なる点が一つ存在している。吉田秋光筆の《聖徳太子》では太子の手に錫ではなく巻子が握られているのである。基本的な太子の姿は「唐本御影」をそのまま踏襲しているだけに、この相違点には重要な意味があると考えられる。

では、この巻子は何を意味しているのだろうか。おそらくだが、この巻子は聖徳太子の業績の一つとされる「憲法十七条の制定」を象徴しているものと思われる。実際、「大日本帝国憲法」の制定と前後する時期から「憲法十七条」が聖徳太子の業績として重要視されていたことは先学により指摘されている。また、法隆寺に関して

も、太子により創建された寺院であり、日本古代仏教文化やそれに基づく日本仏教美術の根本と見なされていた。そう考えるならば、本図は法隆寺の創建と十七条の憲法という「聖徳太子」の文化的・政治的に重要な事跡を「唐本御影」というイメージの中に織り込んだ作品ということができる。言うなれば、本図は当時の人々にとって「聖徳太子」がどのような人物として捉えられていたのかを、如実に表しているのである。

歴史上の人物は、往々にしてなんらかの業績とともにイメージされる。そしてその業績をどう評価するかが、その人物への評価となる。しかしそうした評価は常に一定ではなく、時代によって変わっていく。その評価、あるいは歴史観が歴史画に反映される以上、「聖徳太子」をはじめとした歴史上の人物は、様々な姿を変えながら表現されていくこととなる。実際、本展覧会には「聖徳太子」に関連するイメージを描いた作品がいくつか存在し、そこで描かれているものは様々である。視覚表現の中から時代の状況やその移り変わりを読み解くことが美術史学の醍醐味であり、学芸員が展覧会を通して伝えたいことの一つである。

本展覧会がそうした楽しみを提供できるのであれば、企画担当としてこれ以上の喜びはない。

（万葉文化館主任学芸員 安永幸史）



○新着図書案内○

☆飛鳥むかしむかし 飛鳥誕生編

（奈良文化財研究所編／朝日新聞出版）

☆写経より見たる奈良朝佛教の研究

（石田茂作／東洋文庫）

☆上代写経識語注釈

（上代文献を読む会編／勉誠出版）

☆青木周平著作集

（青木周平／おうふう）

☆山上憶良と大伴旅人の表現方法

（廣川晶輝／和泉書院）

☆大安寺の歴史を探る

（森下恵介／東方出版）

☆大和猿楽史参究

（表章／岩波書店）

利用案内

開館時間—午前10時～午後5時半

休館日—月曜日（祝日の場合は翌日）

年末年始・展示替日

図書室のご利用は無料です
閲覧のご利用になります。

コピーサービス 白 黒 一枚 10円
カラー 一枚 50円

奈良県立万葉文化館万葉図書・情報室

奈良県高市郡明日香村飛鳥一〇

0744-54-1850（代）